

色染物質会

会誌 第4号

Index

ページ		ページ	
1	第3期中間報告	15	クラス会だより S34年
2	京都の史実・3	16	祇園祭の見どころ
6	クラス会だより S28年	20	クラス会だより S38年
7	クラス会だより S29年	22	クラス会だより S42年
8	祇園を愛した先人たち	23	クラス会だより S53年
13	クラス会だより S31年	24	万葉集と染色加工
14	クラス会だより S33年	29	会員名簿

2013年11月発行

第3期中間報告

会員各位におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
平素は当「色染物質会」の運営にご協力をいただきまして篤く御礼申し上げます。
会誌3号でご案内しましたように、当3期は会計年度を平成24年10月1日から平成26年3月31日と半年間延長しましたので、現在まで約11ヶ月間の経緯を報告します。

実施した行事は以下のとおりです。(詳細はHPをご覧ください。)

- * KIT 同窓会支部加盟 24/10
- * 散策会 秋 24/10
- * ゴルフコンペ 秋 24/11、春 25/3
- * 第3回総会、懇親会 24/11
- * 新年会 25/1
- * ゴルフコンペ 春 25/3
- * 散策会 春 25/4
- * 会誌第3号発行 25/5
- * HPの更新(逐次)

等計画どおり遂行できましたが、散策会、ゴルフ、総会等は参加者が少なく課題を残しました。

会員数は第2期末の180名余から200名余と10%入会者が増え、当会にとりまして明るい材料になりましたが、旧「松ヶ崎色染会」に比べますと希望者入会制でもあり小規模です。

入会者の少ない卒業年次を対象に勧誘を進めることも方策の一つかと思えます。会員各位のご同期等には是非入会をお勧めいただきますよう、また各行事にも積極的なご参加ご協力をお願いいたします。

尚HP作品コーナーでは絵画、書道、写真、陶芸等会員の作品の紹介や、個展の案内等を掲載していますので、ご希望の方はご連絡下さい。

平成25年10月吉日
会長 佐藤 忠孝

知ってるようで知らない京都の史実 No.3

陸の孤島 清和天皇陵

* 京都市右京区嗟峨水尾清和 *

京都の最も著名な観光地の一つ《嵐山渡月橋》から西北西約8Kmにこの地名の場所があります。郵便番号は(616-8466)と、一見普通の場所のようですが、此処は何か自然災害が起こるとすぐ陸の孤島となる【危険区域】なのです。夜になるとタクシーですら、慣れた人でなければ断られる場所で、渡月橋から約3千円の距離です。勿論バスは通っていません。最寄の駅？はJRの保津峡です。最寄といっても3.5Kmあり、徒歩90分(曲りくねった坂道ばかり)余りと堂々と書かれています。右の写真は市内から水尾へ通じる唯一の道路の入り口、この先7Kmは殆どが坂道で幅は2m程すれ違いの場所は数える程しかありません。



此処の地名は現在は《みずお》ですが元は《みずのを》と一字多く呼称されていました。1字削減されたのは近年、多分郵便番号が制定された頃だと想像されます。この里は【柚子】の産地として著名で、現在此処の住人の多くが柚子の栽培で生計を立てているとの事、山の斜面の至る所に柚子畑が広がっています。この里からさらに1.8Km離れた所に《清和天皇陵》があります。

此処の住民の先祖はこの天皇をしたってここに住み着いたとか、その後子孫はこの天皇陵をお守りするためにずっとこの地に1000年以上も住み続けているのです。現在この地域の住人は40世帯ほど、百数十名ですが、半数近くが《松尾姓》です。筆者も実は《松尾》で、幼少の頃父に連れられてこの水尾を訪ねた記憶があります。遠い親戚に当たる方が今もこの地に住んでいる可能性が充分ありそうです。

* 清和天皇のこと *

清和天皇は嘉祥3年(850年)文徳天皇の第4皇子として生まれ、臣下皇子の代表的な《清和源氏》始祖と崇められる天皇です。当時の最大の実力者《藤原良房》の娘明子(あきらけいこ)を母として嘉祥3年3月良房の館一条第での誕生です。文徳天皇は立太子を別に定めておられましたが、良房はこれを強引に廃嫡し、生後9ヶ月にして立太子になりました。

文徳天皇が逝去されると九歳で清和天皇の誕生ですが、藤原良房は人臣として初の《摂政》に就任します。以後貞観18年(876)退位までの12年間、良房は清和天皇に代わって全てを取り仕切ったに相違ありません。良房は兎も角、良房他界後の藤原基経

が権力を握って《摂政》の地位を離そうとしなかったのです。この状況に【嫌気】がさし、27歳で突如まだ9歳の貞明親王（陽成天皇）に譲位され、自らは上皇として仏門に入られます。

何故この地を終の棲家とされたのか

清和天皇は誕生以来物心が付くまで、生母と共に祖父にあたる《藤原良房邸》で殆ど過ごしていたようです。何かにつけ、父君の文徳天皇より良房じいちゃんの方を頼りに



昼間でも暗い林の中坂道をS字状に曲がりながら数十分歩きます

するよう教育されていたのは当然でしょう。

藤原良房は嘉祥4年正二位に昇り、続いて斉衡四年（857）太政大臣を拝命します。この翌年に文徳天皇は崩御されるのです。清和天皇が即位されますが、僅か九歳、この結果良房じいちゃんが全てを取り仕切る《摂政》に就任するのは極自然の成り行きでした。

それに先立ち藤原良房には弘仁14年（823）嵯峨天皇の皇女潔姫が降嫁してきます。文徳天皇の皇后明子（あきらけいこ）の母親がお祖母ちゃんなのです。良房は嵯峨天皇に非常に気に入られ自分の娘を降嫁されているのです。父君文徳天皇は良房の様々な手回しのお陰で、実際には即位できる筈のない立場からだったようです。当初父君文徳天皇は第一皇子惟喬親王を立太子に指定され

ていたようですが、良房に遠慮し結論を先延ばしされていたのです。

しかし、世の中は平和＝平安ばかりが続く訳ありません。貞観8年（866年）に起きた応天門の変では、大納言伴善男を失脚させ、事件に連座した大伴氏、紀氏の勢力を宮中から駆逐するのに良房は成功します。この年の8月19日、清和天皇は良房に「摂行天下之政（天下の政（まつりごと＝政治）を摂行せしむ）」とする摂政宣下の詔を与えたことになっています。これが人臣最初の摂政なのです。時に清和天皇は16歳、この宣下は良房の自作自演であることは確定的でしょう。その6年後、貞観14年（872）信頼し切っていた良房じいちゃんは他界します。政ごとを自らやらねばと考えるに十分な年代に達しておられました。

然るに、そこに突如《藤原基経》叔父さんが現れます。「良房じいちゃんに変わり私が全てを代行させて頂きます…」となるのです。このため【やる気】を全く失くされたのでしょうか。その後27歳で突如退位され、余生を山中における仏教修行につき込まれるのです。陽成天皇に譲位後は、水尾に居住し、この地が気に入って、「ここを終



焉の地と定む」と遺詔を残されました。

聡明な方ほど【無常観】が強いのです。周囲の方々特に母親や祖父から、一生懸命に【世の平安】を神仏に祈る事、人々があつと驚くような和歌を詠む事が務めと教えられて成長されました。世の中がその様な事で上手く行く筈がないのを実感するにつれ、『自分のやっている事は一体何なのか…』と疑問を持ち始め、それが無常観に繋がって行くのでしょ

う。世の全ての事から逃れ、一筋に仏門に帰依なさるには【この地が最適…】と感じられたに違いありません。

* 良房の摂関政治と清和天皇と源氏物語の微妙な関係 *

清和天皇が良房に絶大な信頼を寄せられていた事には疑念の余地はありません。だが、藤原基経となると全く別の話になります。平安京は《桓武天皇》が定め、紆余曲折を経て《嵯峨天皇》で確立しました。

摂関政治は藤原道長によってほぼ完成されますが、この時代になって書かれた【源氏物語】は、当時の 50 年前の世の、この間の権力の微妙な移り変わりを虚構の物語として見事に顕しているとのことです。道長は才女の誉れが高かった《紫式部》を、態々宮中に任官させ、摂関政治が如何に優れているかを広く知らしめるためこれを書かせたのではないかとされているのです。次の小倉百人一首の歌を思い出してください。

たち別れ いなばの山の 峰にお生る まつとし聞かば 今帰り来む 中納言行平
ちはやふる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは 在原業平朝臣
この二人は、平城天皇の孫にあたり、異母兄弟で典型的な降下皇族です。しかも二人とも美男子として著名な【伊勢物語】の主人公にぴったりの人物です。清和天皇の生母



《明子皇后》は、在原業平と浮名を流したことで有名？で、長らく皇后とは認められなかった人物。しかも文徳天皇より 10 歳も年上です。この皇后が良房の実の娘なのです。源氏物語の主人公を思い出して下さい。微妙な関係とはこのことを指しているのです。何故業平が《伊勢物語》の主人公だといわれるのでしょうか。実は【光源氏】のモデルではないかといわれる【源融】は清和天皇より少し前にこの水尾の里に隠棲をしているようです。

この時代著名な何名かの人々が隠棲をしていた水尾の里を訪ねられ、いたくこの里がお気に召しました。このような状況下の清和天皇が【酒色】を好まれるのは当然です。高子（たかいこ）皇后の他に、藤原佳珠子、藤原多美子、嘉子女王、兼子女王、忠子女王、平寛子、源濟子、等等判明しているだけでも 15 名以上、これらの后妃との間に 20 名余りの皇子、皇女がおられます。

酒は当時《咀嚼発酵》が主体、京都松尾大社（酒の神様として著名）付近で作られて

いたようです。清和天皇が水尾にお移りになるなら、酒造りに携わっていた人達が共に移るのは自然だったでしょう。松尾姓がこの里に多いのはこれが原因だと筆者自身勝手に想像しています。

退位されてからは、東山栗田郷の円覚寺に出家され、近畿各地の仏道修行の旅に出て、最後に当時京都七大寺の一つであった水尾山寺に入られました。天皇は一生をここで終えたいと仰せになり、里人は此処に新しい仏堂を建て始めます。その間嗟峨の釈迦堂《清涼寺》に仮住まいされ、完成を待たれましたが、ご発病になりやむなく栗田郷の円覚寺に還り養生しますが、遂に崩御されます。

水尾の里人達はいたく悲しみ御霊を【清和天皇社】としてお祭りし、以後里の氏神様として崇めてきました。この里の愛宕山頂に建てられた【白雲寺】は、明治の廃仏毀釈令によって【愛宕神社】と改名され、現在でも火災を免れる神様として多くの参詣者にぎわっているようです。清和天皇陵は江戸時代に一度再建されたようですが、大正時代に本格的に再建され、現在にいたっています。

参考文献 日本の歴史No.5 講談社
街道を行くNo.26 司馬遼太郎
逆説の日本史No.4 井沢元彦

(色染・昭35 松尾秀明)

***後藤芳弘氏の個展が開催されますので下記にご紹介します。**

後藤芳弘 水彩スケッチ画展

—今回も国内外の「水のある風景」約30点展示—
ご高覧くださいませよう、ご案内申し上げます
2013年11月4日(月)～11月9日(土)
11時～19時(最終日17時まで)

マサゴ 画廊
〒530-0047
大阪市北区西天満2-2-4
TEL 06-6361-2255

- 地下鉄 淀屋橋①号出口より5分
- JR東西線 北新地東出口より7分
- 裁判所西側の筋小山医院角入る

<http://www.eonet.ne.jp/~adoruk/masago/>

(連絡先) 後藤芳弘
〒610-0352 京田辺市花住坂1-18-4
ygotou@athena.ocn.ne.jp



平成25年度28会新年宴会

平成25年1月15日 四條大宮西入る アークホテル料亭味舞にて色染昭和28年卒「二八会」を開催しました。その時の参加皆様の集合写真です。



参加人員 9 名

後列左より 亀迫重雄 植村二郎 出原昭巳 西川三郎 吉岡悠

前列左より 田尻弘 家久浩一 太田恵江 萩原理一

太田恵江さんは亡くなった太田光一の奥さんです。

(色染 昭28・萩原狸百 頓首)

色染昭和29年卒同期会

私達の 小、中、&高校等の同窓会の半数は80歳の大台を超えたので もう中止との寂しい雰囲気の中 我々29年卒の色染科は 今年も無事に集まることが出来ましたが しかし卒業当時の人数から見れば今回の

参加者は 1/3弱の8名とかなり 侘びしい集いとなりました

日時・・・平成24年11月8日 正午～15時

会場・・・京都駅 伊勢丹内 上階の加賀屋

この宴席から窓越しに 遠く比叡山が眺められ 否応なしに 学生時代を回顧して 新旧を交えた話題も何かと出てきて 懐かしさが倍増 予約時間の3時間も 夢のように あっという間に過ぎました

そんな中で この会を今後 どうするか との声は かなり強い中 種々の意見を要約すれば

- 1) 会場は遠方よりも 京都近郊が一番良い
- 2) 京都でも1泊したい(宿泊できない人は 宴会だけで帰ってもらう)
- 3) 少人数でも良い 集まれるものだけでも 続けよう

とのことで 来年以降も ずっと続けることになりました 直ちに次回幹事は西村孝一郎君に決定しました



写真添付します

後列 左より 寺田昌平、山方秀夫、梅本 顕、金光範明

前列 左より 時岡嘉一郎、西村孝一郎、西野俊雄、芝山達雄

(色染 昭29・時岡嘉一郎)

「祇園を愛した先人たち」

(鼎会 2 月例会講演より)

(講演主旨)

祇園新橋は江戸時代前期以降、織維町衆に依って繁栄してきた花街である。就中室町友禅衆と墨客との交流に新橋は賑わった。

経済支援と東山の環境文化に恵まれた祇園は舞曲や女紅場などを通じて他の花街には見られない品性と知性の街風が築かれてきた。この環境を求めた白川衆 (都詰駐在武士や、明治以降この大名屋敷に代わった国公立諸校の若者) が白川の流に沿って新橋に通った。

明治以降 茶屋「大友」の文芸藝妓 磯田多佳を中心に文化人、新町衆が集い新生祇園は興る。祇園は「かにかくに祭」を通じて多佳女を顕彰するが有名文化人の影に多佳女が最も親しく交わった浅井忠、室町町衆、母校高等工芸の先人達との思いが薄れてゆくことを残念に思う。

友禅は酒造と並んで近代流通を興した産業として昨今の史観は変わってきた。また西陣に就いては幕府支援下に巨大な利潤を得たが、時代に追随する再投資を成し得ない俛に衰退を招いた。大阪産地とは対照的である。花街や祭りへの過度なる支援や大名金融の失敗が再生への機会を失った。

(色染 昭 2 8 ・西川 三郎)

(注 記)

「鼎会」は染色業界に活躍された方々で構成され、母校色染科同窓生が大部分を占めております。会員数は 3 0 名で 2 ヶ月毎に例会 (講演及び懇親会) を開催しています。

色染物質会各位のご参加を願って当稿をご送付させて頂きました。

なお当会の会長は 2 8 年卒の稲井新郎さん、事務局長は 3 4 年卒の横山清一郎さんです。

(事務局)

(講演レジメ)

1. 祇園の特性

環境

貴賤混在の東山文化。維新の舞台裏。(山中社寺は桃山文化。山麓は洛中火災毎の難民。明治末、東山路貫通で賤民街改善)

支援者

新町衆(友禅・室町の衆。祇園祭)、文人墨客、知恩院の参詣客。

運営

甲部・乙部分離。奉仕と質素儉約の精神が、町風となる。

舞芸、女紅場が、品性と知性を高揚させ、童歌創作の気風を生む。

検番諸策(募集、里子制、施療、身分制、諸契約、待合自立など)に卓越の成果を出す。

2. 町衆と花街

江戸時代の洛中人口は20～30万人。内、この四分の一が西陣、四分の一が花街関係であり、相互密接に関わる。

旧町衆(西陣系商流通)

江戸初期、幕府は西陣系商に絹糸割符権を与え、西陣・幕府共に巨利を得る。

一方、1730年の西陣大火や幕末の糸値高騰、大名貸金倒れは西陣を沈滞させた。

新興の大阪流通は、肥大硬直した西陣を敬遠した。糸商流通の波瀾は、島原と上七軒にも波及することとなった。

新町衆(友禅・縮緬/室町流通)

江戸中期に相次いで始動する。この流通が西陣や洛中経済の下落を支える。

また、新町衆は大阪流通に迎合され、やがてこれが明治以降の京都の新繊維産業につながっていった。

新町衆は、洛東の墨客と祇園に交じりながら、祇園に繁栄を齎した。

ただ、新町衆の過度な浪費(祇園祭など)は、大阪流通の独占の機会を逸し、他産地の林立を許すことになった。

注1.

酒造業、友禅 / 室町の新流通制度(問屋と職人G協議制)は、旧来の産業形態(問屋職人)を離れて新しい流通を生んだ、初期のマニュファクチュアリングである。この時期(18世紀、8代将軍吉宗)に蘭学導入と医薬事業の国産化もあり、近年の歴史観において、この時期が近代の始動として評価されている。(旧来の歴史観においては、ペリー来航時(19世紀)を指す。近代は明朝の崩壊に依る近隣国の自立とも云われる)

注2.

都市文化経済の推移

17～18世紀前半の京都（伝統産業） 18世紀後半の大阪（物流） 19世紀の江戸（消費）

3．祇園史

平安・鎌倉

白拍子（貴族）、辰巳遊郭（賤民）

八坂参詣客を水茶屋が迎える。祇園村と称す。

江戸初期

洛中に四条河原に過度の田楽、芝居繁盛の一方風俗問題の対応もあり、8新地1芝居通りが設置される。縄手茶屋が公認される（祇園甲、新橋）。当初島原統轄下にあり質低下あるも町衆支援により逐次向上。

江戸中期

祇園乙が認可される。甲乙間の利害が発生する。

明治中期

祇園甲、新開地が認可される。対抗意識の中にも新橋繁盛。新開地に近代企業の進出目立つ。

現在

花街衰退するも、祇園景観と祇園祭は市の顔として行事として保護継続される。

4．ルネッサンス

白川若衆（駐在武士）や維新の力は新橋を賑わす。維新後、この新風を若者と学生が受け継ぐ。

明治中期、新橋茶屋「大友」の磯田多佳らが醸す文芸気風に文人墨客、新町衆、学者らが集い、祇園の新文化が誕生する。

5．これからの祇園

本業衰退下、伝統景観の保持を市民は願うが、法規制や土地国有化の支援がどこまで支え切れるのであろうか。

[参考資料]

1) 中澤岩太と浅井忠

中澤は東大教授、京都工科大学（現在の京都大学工学部）学長を経て当時（明治35）創学の京都高等工芸（現在の工芸繊維大学）初代校長に就任する。

中澤は文部省留学生としてフランスに留学中の浅井忠を同校色染科教授に招聘する。浅井は専門の洋画以外に当時欧州に風靡したアールヌーボーの風潮や陶造形にも興味する近代感覚の芸術家であり、工芸を市民感覚や工学域に普及することを考える学究の人でもあった。中澤は茶屋「大友」の客であった。

2) 浅井忠と磯田多佳

内国博覧会協議に出席する黒田清輝を迎え中澤主催で祇園中村楼に宴を開く、浅井並びに高工各教授が列席する。中澤が呼んだ「大友」の藝妓 磯田多佳が一中節などの舞曲を披露し、浅井は心酔する。数年を経て妓籍を離れた多佳は浅井と九雲堂（八坂神社門前四条通り、現存）を営む。浅井は九雲堂工房に陶造形を憩い、これを高工の師弟や友陶会の友が扶け、多佳が店頭で売った。当時「鷹狩する武士」（現在工織大保存）の創作に苦悩する浅井は九雲堂工房にその疲れを癒したと伝えられている。浅井は明治40年急逝、傷心の多佳女は九雲堂を兄に譲り「大友」に戻る。

多佳は新橋茶屋「大友」の次女（明治12年生れ）父は元田辺藩士、姉は一力女将、才気深い瞳と舞曲が輝いていた。読書と詩歌を通じて育った人柄が文芸茶屋を創りあげた。多佳は昭和20年終戦前に亡くなるが終生、多くの文人墨客や学者、町衆と交わりのなかに、また浅井や多佳を慕った学生や若衆との暖かい交流があった。

3) 多佳女追善に集う人たち

多佳女のS21とS32の追善供養は養嫡子磯田又一郎（洋画）加賀正太郎（財界）谷崎潤一郎夫妻（文人）金子竹次郎（染織試験場？）坂部三次（ニック創業者、京都織物？）及び祇園関係者の尽力により挙行、多くの祇園関係者、町衆、学者、文人墨客が参列した。西陣、室町、染織関係者の列席も多かった。（芳名録記載は氏名のみ、職業など不詳）特記として杉本忠三氏の列席が目玉を引く、氏は明治43年京都高工（色染科）卒 杉本練染（株）専務であり。また永年に亘り同校の同窓会長を務めた。多くの同校関係者が多佳を慕っていたことを推察する。

筆者の父も祇園の灯油屋に生まれ、幼児の頃は近隣の多佳女や雪女（モルガンお雪）に子守られて育った。父とは折りに触れて路上などに語り合う人達でもあった。

多佳女は有名なる知識人、文化人との交流に依って祇園復興の人と迄云われ、かにかくに祭りの祭神の如くに語られる人となったが、浅井忠との秘かな愛に生き、また関わる染織業界の町衆や学生たちに慕われる人柄こそが多佳の本来の姿であろう、こんな思いに駆られながら此処に記す。

4) 祇園に育てられた学生たち

祇園は若者衆や学生達を大事にする伝統的な気風があった。

「宮さん宮さんおん馬の前にひらひらするのはなんじゃいな...」

戊辰の戦いに向かう武士の胸に飾られた布きれは実は祇園の芸妓が自らの帯の端を裂き、武運を願って贈ったものである。

明石国助（京都高工 明治42色染科卒）は戦後母校に講義する時、当時の学生が舞妓達と待ち合わせする縄手通大和橋東南の喫茶店「らんでんぼう」（ランデブーの模語）がまた高工生の溜まり場であることを語られた。店名は変わっていたが最近までは存続していた。当時 白川を経て祇園入する諸学校（高工の他に三高、京大、美専）も同様な溜まり場があったと聞く。また当時この地に関わる有名人やそのロマンスもまた多い。

池田勇人、森光子（愛の結晶）川上（お雪恋人）寒川（詩人）藤喜久（近衛公側室）

.....

5) 新橋に遊んだ人達

茶屋 「大友」(多佳追善供養芳名記載を含む)

文人 谷崎潤一郎夫妻 吉井勇 夏目漱石 高浜虚子 与謝野鉄幹 尾崎紅葉
幸田露伴 長田幹彦 池部義象 ...

墨客 浅井忠 梅原竜三郎 安井曾太郎 横山大観 竹内栖鳳 黒田 小野竹喬
岡本橋仙 ...

学者 中澤岩太 浅井忠 厨川白村 上田敏 湯川玄洋 ...

他 坂東三津五郎 簀助 片山春子 西川貞三郎 田中緑紅 茂山 大津(銀閣
寺)中川(角屋)

町衆 芳名録記載数十名(大半が室町、友禅関係者)大阪財界 加賀正太郎 岸本
左衛門 ... 京都染色界 坂部三次 杉本忠三 金子竹次郎 ...

他の茶屋

政治思想 河上肇 近衛秀麿 西田幾太郎 倉田百三 西尾末広 ...

維新の白川衆(武士) 越前 加賀 彦根 会津各藩士 及び諸藩士

6) 磯田多佳に絡む諸詩

かにかくに祇園は恋し寝るときも枕のしたを水の流るゝ(白川の碑) 吉井勇
紫陽花の花に心を残しけん人のゆくへも白川の水 谷崎潤一郎
春の川を隔てゝ男女かな (木屋町御池鴨川辺の碑) 夏目漱石
うすものや河原つたひの草しめり 磯田たか

(色染 昭28・西川 三郎)

イロヨン会（色染昭和31年卒）クラス会

平成25年4月3日

今回の趣向は久々に母校に集まり校内を散策するという懐旧ツアーを行いました。卒業当時の建物は昭和5年竣工の工芸学部本館と南側に立つ倉庫と校門だけで、すっかり変わった様子に改めて驚いた次第でした。

本館内と庭園各所に置かれた創立当時の校長中沢岩太及び鶴巻鶴一、浅井忠、武田五一、萩原清彦、福井松雄の各先生方の胸像に次いで、工芸資料館などを巡った後昼食をとり歓談の時を過ごしました。

食後は京都植物園を訪れて満開のサクラの花を楽しみました。

（色染 昭31・和田弘）

出席者は10名でした、
写真は母校講堂にて

左から、和田、井尻、湯川、小阪、島谷、安田、米長、中山、松永、小倉



平成24年度543会クラス会（色染昭和33年卒）

今年の「関西543会」は、京都を離れて、和歌山の旨い魚を食べようとの合意で、平成24年9月12日午前11時に南海電車「みさき公園駅」に6名集合し、快晴の紀淡海峡の向こうに淡路島を眺めながら、海岸を散策後、12時頃から、地元平井君紹介により、駅前のいけす料理店「寿司よし」にて、新鮮な魚料理や寿司を肴にして夕刻まで歓談しました。以前は、もっとメンバーが多かったのですが、阪田、村田君が欠席（その後亡くなり）出口君、三宅君は病床にあり、歳月と共に、歳々年々人同じからず、一抹の寂しさがありました。

しかし病気の話は止めようとのことで、近況報告や学校の思い出話、政治・経済から趣味まで、幅広い話で歳も時間も忘れ終始賑やかで盛り上がりました。夕刻、来年度までの互いの健康と、またの再会を約し日本一と言われる名産「しらす」を土産にして、散会しました。

以上



平成24年9月12日 関西543会 於「寿司よし」南海みさき公園駅前店

向かって左から 福田、井上、西山、平井、佐々木（忠）、菱田

山紫水明会（昭和34年卒）関西同窓会

我々34年卒の関西在住者13名は毎年3回程度集まっていますが、今年最初の集いとして2月21日にその内の8名が京都寺町三条の「かに道楽」に集まり、旬の蟹を肴に近況を語り合いました。

食事の後、メンバーの一人である大多和君が師範をしている書道の水明会の墨聚展が近くの京都文化博物館で開かれていましたので彼の案内で書展を鑑賞しました。彼の作品は長い間筆を持った事がない素人の私にも流石と思えるような品格のある書でした。本HPの作品欄に投稿されていますのでご覧下さい。

書展鑑賞後は「イノダコーヒー本店」でコーヒーを飲みながら鑑賞してきた書道の話をして、次回は初夏前に元気で集まろうと約束して別れました。

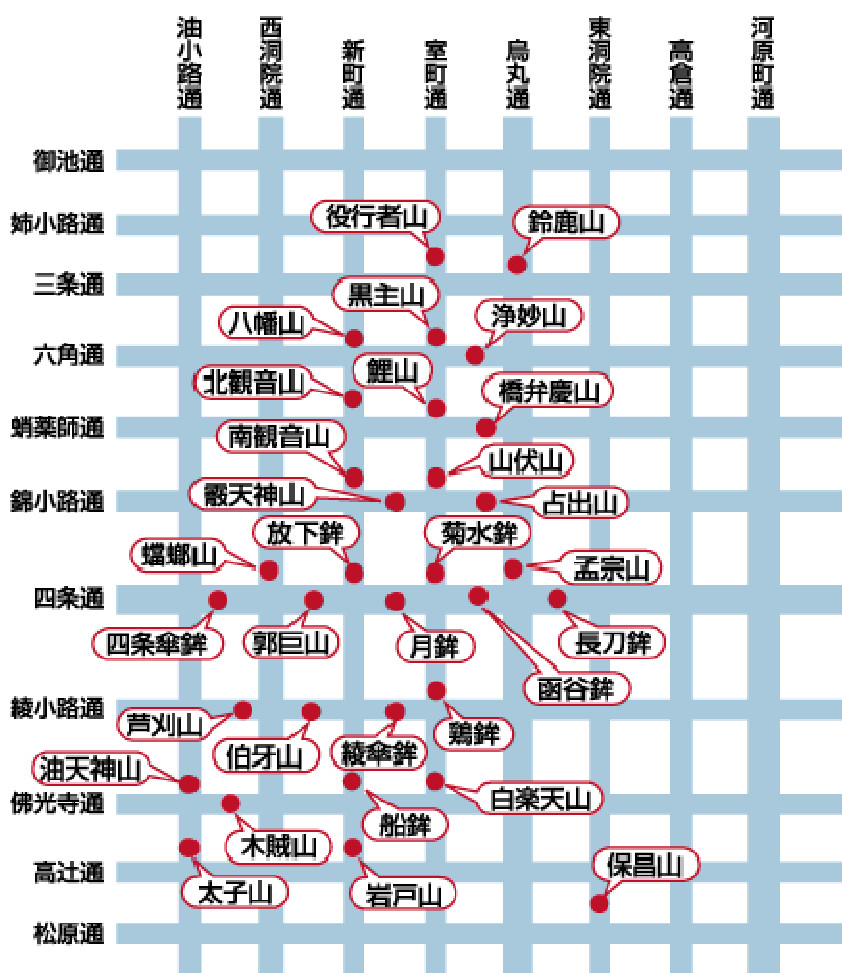


後藤 佐藤 高瀬 甫天
萩原 藤井 大多和 横山

（色染 昭34・横山清一郎）

祇園祭りの見どころ

毎年7月12日頃から鉾町(北は三条通り～南は五条通り、東は烏丸通り～西は油小路通り)では道路わきに鉾や山が建てられます。鉾とは車輪の付いた大型の飾り車で、長刀(なぎなた)鉾、函谷(かんこ)鉾、月鉾、鶏鉾、放下(すはま)鉾、菊水鉾、船鉾と現在は7台の鉾があります。2年後には、1864年の禁門(蛤御門)の変でほぼ焼失した大船鉾が復活するそうです。山とは小型の飾り屋台で、車が無く担ぎ棒が備えられたもの(例外として車輪を備えた大型の山も3台ありますが)で、数えてみると25台ありました。鉾には毎晩、十数人のゆかた姿の囃子方が乗り込み、笛方2名、太鼓方2名、鉦(かね)方8～10名が祇園囃子を奏で祭り情緒が盛り上がってきます。祇園囃子は我が国各地の笛、太鼓、鉦の元気の良い祭り囃子とは全く異なり、実に優雅で美しい調べで鉾町を包んでくれます。山鉾巡行の17日の前夜までの約5日間、鉾町は人出で賑わいます。



子供の頃の住まいが鉾町の近くでしたので、毎年親に連れられて宵山(山鉾が出揃った鉾町の宵)に出かけたものです。その頃は夜店(露店)で、キリギリス、蛍、カブト虫やクワガタ虫を、それぞれの地元から大きな籠に入れて持って来て売っており、それを買ってもらうのが楽しみでした。キリギリスは竹で作った虫籠に入れてくれます。ある時キリギリスの代わりにクツムシを買ってもらったのですが、一晩中ガチャガチャとうるさく鳴き続けたのを覚えています。今では残念ながら夜店で見ることはありません。

長じての宵山での楽しみは、祇園囃子を聞きながら鉾や山に安置するご神体（人形）を拝む（見物する）ことです。巡行の際ご神体は山鉾に載せられるのですが、宵山では山鉾が建てられている近くの町屋の中に安置されています。一晩でとても全部の山鉾のご神体を見ることは不可能ですが、拝観を楽しみながらの宵山散策をしていただきたいと思いますし、私が好きでぜひ見ていただきたいご神体の祭られている山鉾9台を紹介します。南から北への道順に沿って山鉾ご神体を列記すると、

保昌山：平井保昌（ひらいほうしょう）

岩戸山：天照大神、手力男尊（たじからおのみこと）

船鉾：神功皇后、住吉明神、鹿島明神、安曇磯良（あづみのいそら、海神）

蟪螂山（とうろうやま）：動くカマキリ

占出山（うらでやま）：神功皇后

南観音山：楊柳観音、善財童子

橋弁慶山：牛若丸、武蔵坊弁慶

浄妙山：筒井浄妙（つついのじょうみょう）、一来法師（いちらいほうし）

役行者山：役行者、一言主神（ひとことぬしのかみ）、葛城女神

となります。

先ず地下鉄の四条駅から南（京都駅）方向に歩いて5分くらい、烏丸通りの東、2筋目の東洞院通り松原上る（松原通りを北へ）に、ぽつんと1台だけという感じで保昌山が立っています。平井保昌は藤原道長・頼通父子の家司を務め、武勇に秀で「道長四天王」の一人でありました。のちに道長のすすめもあり女流歌人和泉式部と結婚しています。その保昌が恋人にせがまれて紫宸殿の梅花を手折っています。北面の武士に見つけられ、矢が頭をかすったと伝えられています。美しい鎧姿の保昌の立ち姿がご神体です。この保昌山だけが鉾町から東南にはずれたところに立っているので、ここへ行くのは後回しにした方がよいかも知れません。

保昌山からもと来た道を西北へ、烏丸通りを西に渡って、2筋目、新町通り（南北）に面して岩戸山が立っています。近くの町屋の中にご神体が置かれています。天照大神が天の岩戸の中にお隠れになり、天鈿女命（あめのうずめのみこと）が裸踊りを始め、大神が岩戸を少し開けて覗いてみたところを、手力男尊が大力で岩戸を開けたという神話の登場人物です。大神の美しい姿、手力男尊の男性的な姿が魅力的です。

岩戸山から北を見ればすぐ近く、この新町通りに船鉾が立っています。船鉾は古事記に書かれている神功皇后が新羅征伐（全く根拠薄弱の古事記の作り話）のために出陣する船をかたどっています。皇后は鎧に身をかためた立派なお姿です。これを守護する住吉明神、鹿島明神、安曇磯良（海神）はそれぞれに恐ろしげな良い顔をしています。安曇磯良は竜宮の満干珠（みちひるたま：潮の干満を自由にコントロールできる宝珠）を手を持っています。鹿島明神が持っている長刀（なぎなた）は和泉守真海（1661～1672）作の逸物です。この船鉾と後述の南観音山は拝観料を取りますが、鉾の上にもあげてくれます。その他の山のご祭神は自由に拝観できます。

船鉾から北へ四条通りを横切って、四条通り沿いに西へ西洞院通り（南北）まで歩いて10分、西洞院通りを北に行ったところに、蠶螂山（とうろうやま）があります。1985年に109年振りに復活されたもので、他の山鉾とは様子が違った見せもの的な、緑の色も美しい大きなカマキリが山の上で動いています。楽しい見ものです。

四条通りのひとつ北が錦小路（東西）です。蠶螂山から東へ歩いて10分、通りの南側に占出山（うらでやま）が立っています。神功皇后が九州肥前の松浦川で鮎を釣って新羅征伐の吉祥を占った場面で、釣竿を持った神功の姿は神々しく、その時子供（応神天皇）を孕んでいたことから安産の守り神として京都のご婦人はお参りします。近所の子供たちがご神体の周りに集まって「安産のお守りは・・・」と大きな声で歌っているので、近くまで来ればその歌声でご神体安置の場所がすぐわかります。

占出山の立つ錦小路を西へ歩き、2筋目、新町通り（南北）を右に折れたところに南観音山が立っています。ここは船鉾と同様拝観料を取りますが、2階に楊柳観音とお付きの善財童子が安置され、またこの山は大きくて中で祇園囃子を演奏しているので、囃子の合間に山の中に入ることができます。この観音様は「あばれ観音」と言って、7月17日の山鉾巡行の無事を祈って、16日の深夜に台座に乗せられて近辺を走り回ること知られています。この夜には大勢の人が見物に集まります。数年後には17日巡行の先の祭り（元通り（50年振り）に分けられるとのこと）と24日巡行の後の祭り（この度の推奨山鉾9台のうち3台が後祭り）の23日深夜に見に行けば、「あばれ観音」を少しはのんびりと楽しめるのではないかと考えていますが、さて、それまで元気で居られるかどうかは？です。

南観音山から北へ、つぎの東西の道路が蛸薬師通りです。この通りを東へ行くと左側に橋弁慶山があります。ここは町屋の二階が開け放たれていて、五条橋の上で戦っている牛若丸と弁慶が見えます。下の道から見上げるので距離があり、細部にわたっての観賞ができないのが残念ですが、牛若丸は橋の擬宝珠（ぎぼし）の上に高下駄を履いて片足で乗っています。高下駄の前歯だけで橋の擬宝珠に牛若丸の人形が支えられているのです。多くの山鉾の中でも屈指の古いものだそうです。

蛸薬師通りの一つ北の六角通り（東西）南側に浄妙山があります。これは平家の横暴に憤慨して旗揚げした源三位頼政（げんざんみよりまさ）軍と平家軍との戦い、宇治川合戦の一場面です。平家方三井寺の僧兵、筒井浄妙が宇治橋を渡って一番乗りをしようとするところを、同じ山法師の一来法師がそうはさせじと浄妙の頭上を飛び越える瞬間です。浄妙の鎧は室町時代のもので重文だそうです。迫力のある場面で、数本の矢が刺さっている宇治橋の上での二人、山鉾の中でも随一の名作です。宵山に出かけたら毎回私はここを訪ねます。

蛸薬師通りから北へ2筋目、三条通り(東西)室町の北に役行者山が立っています。役行者、一言主神(ひとことぬしのかみ)、葛城女神の3体が見られます。それぞれが良い顔をしています。実はこの3体の関係が定かではないのですが、行者が大峰山と葛城山に橋を架けようとして鬼に命じたとの伝説によるものでないかと言われています。制作時の由緒もわからない程に古いものということです。

以上の9か所のご神体を一晚で見るのはとても無理です。また一日かけて見たとしても結局、何が何だかこんがらがって頭の中が混乱するだけです。ですから先ずは4、5か所を訪ねて、残りは次の機会に訪ねるのが良かろうと思います。銚町の道路はいずれも一方通行になっていますが、宵山の数日間はその道も車は通りませんが、人波が一方通行になるように交通整理されていますので、次の山銚へ行こうと思っても道路をうまく選ばないとたどり着けません。銚町の地図が山銚のちまきやお守りの売り場で手に入りますので、それを見ながら道を選ぶ必要があります。

祇園祭りの楽しみは宵山見物と7月17日の山銚巡行見物でしょうが、巡行の方はカンカン照りの梅雨明けの暑さの中で、ゆっくり長々と時間をかけての32台の山銚の巡行は、初めは珍しくても、結構遠くから眺めるのでご神体もよく見えず、すぐにしんどくなります。私にとって宵山は情緒があって、祇園囃子の優雅な音色に包まれ、ご神体の拝観も楽しく、今までに何度出かけたことでしょうか。ただ、15、16日は四条通りも歩行者天国になりますが、とにかくものすごい人出で敬遠します。13日には山銚が建ち並ぶので、13日、14日は比較的人出も少なく、お出かけになることをおすすめ致します。

(昭35・色染 松岡謙一郎)

色染 38 年卒（みつば会）東京地区の駄弁り会

——小畠堯画伯の南画鑑賞会——

同級生の小畠堯君（以下画伯と呼ぶ）から第 53 回日本南画院展への展示が国立新美術館で開催される、という連絡があり、3月24日に東京近郊在住の同級生が集まった。集まったメンバーはきっかけを作ってくれた画伯、場所アレンジ役の酒井君、遠路群馬から参加の渡邊君、都内近郊の三河君、鎌田君、中里君、石野君、早貸君の8名である。

南画*の鑑賞会はまず画伯の案内で絵の鑑賞をする。展示会場は国立新美術館の3階で凡そ185点の南画が展示されている。

* 南画(南宋画)とは、唐の王維に始まるとされ、我が国には江戸時代にもたらされた東洋美術の精粹水墨画・墨彩画である。

画伯の絵は下図の如き大きなF120号(1.94m × 1.3m)の墨絵である。東京会場へ出展出来るにはそれ相応の技量が必要で、画伯は過去何度も出展されており、時々賞も受賞されている。今回の作品は題名が『耀(よう)』で、琵琶湖の波に反射された光の輝きを墨の濃淡で使い分けて繊細に表現されている。今回出展の作品は残念ながら賞には至らなかったが、去年は受賞されていた。他の受賞された作品と比較しても甲乙付け難いくらいの迫力がある。沢山の優秀な作品を審査する方も大変難しいであろうと推察される。



第53回 公益社団法人日本南画院展

後列左から 酒井 紘 鎌田興太 渡邊勝彦 三河明義
前列左から 中里寿弘 小畠 堯 石野博吉 早貸正幸

鑑賞が終わり、国立新美術館庭園の満開の桜の前で記念写真を撮った。



後列左から鎌田興太 石野博吉 小嶋 堯 中里寿弘
前列左から渡邊勝彦 早貸正幸 酒井 紘 三河明義

新宿の三井ビル 5 4 階から
東京の夜景を眺めて懇談会

絵画鑑賞の後、場所を新宿の三井ビルへ移動し、ビルのF 5 4 から夜の都内の町並みを見下ろし歓談する。話題はまずは作品のうんちくから始まり、健康の話、最近手術した早貸君の手術時の痛みや酒井君のふらつき現象、亡くなった方の人数かぞえ(既に6人が亡くなっている)、近く催される京都での同窓会の出席予定者、その近況・噂、同窓会予定会場の京都清水・五条坂の怪談噺など、学生時代の性格・話しぶりは変わらない。学生運動の話、家族、菜園、景気、株、競馬などにも及び話題が尽きない。次回京都での卒業50周年の記念同窓会での再会と、時々東京での会合を約し散会した。

(色染・昭38 早貸正幸)

色染昭和42年卒クラス会

今年は、同期の多くが古稀を迎えるに当たり、8年振りに京都で開催しました。当日は東京、岡山の遠方からの出席者もあり、15名が集い旧交を温めることが出来ました。

同期生の内2名は、自営の染色業で現役として奮闘中です。現役を引退した者は絵画や陶芸等、それぞれの趣味の世界で健康第一と取り組んでおります。

(文責 色染・昭42年 北尾三治)



平成25年2月22日「古稀を祝う会」新都ホテル京都

写真後列左より

福井良一 田村庄司 梅木弘道 坂井勝也 山口泰戊 北尾三治 坂本昭 畝利夫
(円内：竹岡健一)

写真前列左より

早藤隆生 木村義弘 駒形英子 永井敬子 田中正孝 熊谷道彦

色染昭53卒クラス会

(第2回ゴルフ会)

平成25年3月23日、富田林市にある聖丘カントリークラブにて、2回目の同窓ゴルフ会を開催しました。昨年は2組8人の参加でしたが、今年は残念ながら2名が仕事で不参加のため、6名の参加という少しさみしいゴルフ会となりました。

昨年のどしゃ降りのゴルフ会と違って、少し薄曇りではありましたが、時折日も差すまざるの天気、皆楽しく一日を過ごすことができました。

桜の開花を当て込んでのエントリーでしたが、残念ながら、ちらほら咲きで、名物の花見見物とまではいきませんでした。参加した田中君は、なんと3時間かけて鳥羽から駆けつけてくれ、3時間かけて鳥羽へ戻って行きました。来年も、参加することを誓って、参加者が増えることを祈念して閉会となりました。

(色染 昭53・高橋伸和)



(写真左より) 田中 藤村 高橋 長井 伊山 平林

万葉集と染色加工

わたしは万葉集を研究しているわけではありませんし、趣味として入れ込んでいることでもないのです。ちょっとかじって見ただけなのですが、そこには染料や染色加工に関連した歌がいくつもあることに気づきました。

これらの歌を読むと、染料のもとになる植物や繊維加工の情景がその時代の風物になっていたり、古代人の染色加工に関する思い入れのようなものも伝わってきたりして、大変興味深いものがあります。

ここではそれらの代表的な例を幾つか取り上げて紹介して見ます。

＜春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山 持統天皇＞

この歌の大意は「今年も春が過ぎて夏が来たんやね、（その証拠に）香具山に白い衣を沢山干してはるの見えるわ」というようなものではないでしょうか。小倉百人一首にも入っている有名な歌ですが、飛鳥の宮殿から遠く香具山を眺めて詠んだのだと思います。

「衣を干す」のは何のためか。これは漂白をしているのでしょうかね。

漂白していない綿や麻はいわゆる生成色をしていて白くありません。古代の人といえども白い服が欲しかったと思われまので、漂白はどうしてもしなければならなかったのです。当時はもちろん漂白剤などはないので、素材を天日に干し、次に水で晒す、ということは何度も繰り返して少しずつ白くして行っただけなのです。

この歌の背景には、初夏になると晴天の日は紫外線も多くなってオゾンが発生し、活性酸素が生成して干した生地の中の夾雑物を分解する、分解した夾雑物を水で晒して流し除去する、これを繰り返して白くして行く、という繊維製品の漂白工程があると思うのです。

「衣」とあるものの、必ずしも縫製したウェアとは限らず、生地であった可能性も高いですが、もし縫製品なら最古の製品加工だったかも知れません。

＜茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る 額田王＞

この歌を解釈しますと、「紫草が生えている標野へ行ったとき、そこであなたがわたしに向かって一生懸命に手を振るものだから、番人のおっちゃんにわたしたちは怪しいのではないかと思われそうでハラハラしたわよ」という感じです。

これは天智天皇が一族郎党を引き連れて蒲生野へ狩りに行ったときに詠まれた歌ということで、ここでの「君（あなた）」は大海人皇子を指しています。

額田王は天皇の妃ですから当然同行していますし、天皇の弟の大海人皇子も一緒でした。

彼女は天智天皇の妃になる前は大海人皇子の妃でしたから、話がややこしくなります。「野守」というのは天智天皇を指しているという説もあるのです。

この行事は「狩り」といっても鳥獣を狩るものではなく、薬草狩りだったということ

です。紫草など有用植物を取りに野原へ出かけた、という行楽なのでした。

「標野」とは「メ野」、すなわち「関係者以外立入禁止」の野原のことです。ここには大切な紫色の染料の原料となる紫草が生えていました。ここが自生の群落か栽培していたのかはわかりませんが、いずれにせよ番人を置いてコントロールしていたのです。紫草は根に色素がありこれを煎じるなどして抽出し、植物を燃やして出来た灰の液で処理した木綿などの繊維を浸して紫色に染めました。



写真1 紫草

紫草の根にある色素は「シコニン」というポリフェノールで、金属と配位して水溶性の錯塩を形成します。植物の灰で処理するのは、灰の中の金属を繊維に付与するという「媒染」を行っていたのでした。

「シコニン」という名称は、紫草の色素の化学構造を同定したのが日本人化学者だったので、紫根のなかにある色素、という意味で命名されたのです。

この歌の冒頭にある「茜さす」という語句は、「紫」を導き出す「枕詞（まくらことば）」といわれるもので、歌の中では意味を持つものではありません。「紫」の他に「日」、「昼」、「照る」などにも掛ります。

もともと「茜」とは根から赤の染料を抽出できる植物の名前です。根が赤いので「赤根」→「あかね」→「茜」と名前が変遷したということは容易に想像できるところです。茜には大別して「日本茜」と「西洋茜」とがあります。色素の化学成分は日本茜では「パープリン」、西洋茜では「アリザリン」と呼ばれるものですが、どちらもアンスラキノンの誘導体で、水素三つが水酸基で置換されるとパープリン、二つだとアリザリンなのです。

これらはやはりポリフェノールで、媒染することによって発色・固着させます。ツバキの葉を焼いて作成した灰を使うと鮮やかな赤色が得られるといわれています。これはツバキの葉のなかに多く含まれる金属成分のアルミニウムの作用によるもの、ということです。



写真2 茜（西洋茜）

染色浴中に茜を投入すると（茜差す）→染色液がぱっと赤くなる→太陽を連想→「日」、「昼」、「照る」を導き出すことばとして使用されるようになった、「紫」を導くのは太陽からの連想とは異なって、色の類似によるものである、というふうに素人のわたしは考えています。ちょっとこじつけのようですね。また正式の学説がどうなのかも知りません。

しかし「山」という言葉にかかる枕詞「あしびきの」は次のようにしてできたといわれています。

＜山越えのためなどで山を歩くと足が疲れ、最悪の場合痛めてしまって足を引きずって歩かなければならないので、「山を歩くと足を曳く」→「足曳きの山」→「あしびきの」が「山」という言葉を導き出すようになった＞

そうだとすると、枕詞「茜さす」成立の素人仮説も似たようなものだと思います。

紫の染色といえば、こんな歌もあります。

＜紫は灰指すものぞ海石榴市の八十のちまたに逢へる児や誰 詠み人知らず＞

この歌の意味は、「紫染めをするときは灰を入れるのですよ、それもツバキの葉を焼いて作った灰をね、ところでツバキといえば海石榴市のにぎやかな路上で出会った可愛い娘は誰なのだろう」という感じのものでしょう。

「海石榴市（つばいち）」とは、現在の奈良県桜井市にあった交易の場で、「つばいち」の他「つばきいち」とも「つばきち」とも呼ばれていました。また「八十（やそ）のちまた」は、「道が多く枝分かれした繁華な場所」のような意味だと思います。

「紫は灰指すものぞ」の部分はツバキを導き出す「序詞（じょことば）」といわれるものです。本来は歌の中で意味を持つものではなく、ここでは「海石榴市の・・・」以下が本当に言いたいことなのでしょう。

しかしその序詞に、染色の手法に関することを使用しているのが興味深いです。

作者は「詠み人知らず」ということで誰だかわからないのですが、可愛い女の子に興味を持っていることから、若い男性だと考えられます。また、染色関連の序詞から、その業界の人だろうということもわかります。染色技術者見習、というところでしょうか。「みなさんをご存知ないでしょうけれど、こんな風にするものなんですよ」と誇らしげに言っているようです。

紫染めは大陸から伝わってきた当時の最先端技術で、染色の仕事に携わっている誇りがこういう歌を詠ませたものと思えてなりません。

しかし、そんな先端的技術である染色レシピを、ズバリ詠ってしまって大丈夫だったのでしょうか。後で親方から「あほんだら、ノウハウばらしてしもたらあかんやんけ」などとドツかれはしなかったか、他人事ながら心配になります。

＜紅は移ろふものぞ橡の馴れにし衣になほ若かめやも 大伴家持＞

歌の大意は次のようなものでしょう。「紅（くれなゐ）で染めた衣服はきれいだけど色が褪せやすいよ、橡（つるばみ）で染め、着用・洗濯を繰り返して着馴らした衣服より優れているわけがない」。

「紅（くれなゐ）」とは「くれのゐる」すなわち「呉の藍」です。藍はインディゴの藍ですが、染料全般を示す言葉でもあったので、「呉の染料」すなわち「大陸から渡来した染料」の意味で赤い色であっても「くれなゐ」と呼び、「紅」の字を当てたのです。紅染めには紅花のはなびらから抽出した色素を使用します。



写真3 紅花

紅花の色は写真のようにオレンジ色ですが、これは紅の色素カルタミンの他にサフロミンと呼ばれる黄色の色素が含まれているからです。

サフロミンは水溶性なので、最初にはなびらを水に漬けて溶かし出してしまいます（これを黄色の染料として使うこともあるようです）。

残った紅色の色素カルタミンはアルカリ性になると水に溶けるようになります。アルカリ性の水で抽出した染液に被染物を入れ、色素を吸着させてから酸を加えてpHを下げると、繊維上で再び水に不溶性となり固着できるのです。

こうして得られた染色物は鮮明できれいな紅色を呈していますが、それだけに耐光堅牢度が良くないのだと思います。家持はそのところを指摘したのでしょうか。

一方の「橡」とはクヌギの団栗のことで、皮から抽出した色素で媒染剤を使用して染めます。色目は媒染剤の種類によって、薄茶色からセピア色くらいのもものらしいです。この色素の化学成分がどのようなものかわかりませんが、媒染をするところを見るとポリフェノールの一種ではないか、と思います。

この橡染色物は地味な色なので、洗濯を繰り返していると色も落ち着いてきて変化しにくくなります。色目が色目なので汚れも目立ちにくく、普段着などには好適だったのでしょうか。そういう性質を取り上げて、紅花染めより橡染めが優れている、と家持は詠ったのです。

ところで、この歌は上記の大意以外に寓意も含んでいると言われています。派手な色の紅を遊女に、地味な色の橡を家庭を守る妻にたとえていると言うのです。寓意としての意味はつぎのようなものでしょうか。「フーズクの女にもてたといい調子に乗るんじゃないぞ、連中は金の切れ目が縁の切れ目で、すぐに離れて行く。それに引き替え、家にいる糟糠の妻は地味だけどいつまでも愛情を保っていてくれる、それに優るものはあろうか」。

以上代表例として四首の歌を上げましたが、他にも沢山あると思います。このように、古代のひとびとは美しい色の衣服を着ることについて歌に詠むほど強い関心を持っていました。これはもちろん（歌は詠まないにせよ）現代でも同じですし、将来も変わらないでしょう。

わたしは、母校で学んだ知識をもとにして、ひとびとが強く望む美しい色の衣服を創り出すこの技術―染色加工―に携わることができたのは幸いなことであった、と感じています。

この稿を作成するにあたり、次の書物を参照しました。

- ・伊原 昭「万葉の色―その背景をさぐる」笠間書院（1989）
- ・増井幸夫他「植物染めのサイエンス―万葉の色を化学する」裳華房（2007）

（色染 昭40・田中興一）

会員名簿

会員数：206名

平成25年9月30日

▲は携帯メール

2期：H23. 10～H24. 9

3期：H24. 10～H26. 3

	分類	氏名	メール	2期	3期
1	S14	小崎 輝郎		◎	
2	S14	古川 敏一	○	◎	◎
3	S19	小原 究		◎	◎
4	S19	宮永 正夫		◎	◎
5	S20	小黒 清明		◎	◎
6	S23	勝田 房治		◎	◎
7	S23	小出 宏		◎	◎
8	S23	中川 益男	○	◎	◎
9	S26	水谷 昌史	○	◎	◎
10	S28	稲井 新郎		◎	◎
11	S28	田尻 弘		◎	◎
12	S28	西川 三郎	○	◎	◎
13	S28	萩原 理一	○	◎	◎
14	S28	吉岡 悠	○	◎	◎
15	S29	梅本 颯		X	◎
16	S29	北浦 孝悦		◎	◎
17	S29	時岡 嘉一郎		X	◎
18	S30	井上 治彦	○	◎	◎
19	S30	末包 光太		◎	◎
20	S31	井尻 三郎		◎	◎
21	S31	岡野 志郎		◎	
22	S31	小倉 昭		◎	◎
23	S31	北川 全應		◎	◎
24	S31	上妻 喜久男	○	◎	◎
25	S31	小阪 能一	○	◎	◎
26	S31	中山 茂		◎	◎
27	S31	安田 功	○	◎	◎
28	S31	湯川 謙吉		◎	◎
29	S31	米長 粲	○	◎	◎
30	S31	和田 弘	○	◎	◎
31	S32	岩田 彬	○		
32	S32	坂井 武司	○	◎	◎
33	S32	阪田 昭藏	○	◎	◎
34	S32	塩路 貴		◎	◎
35	S32	原 栄	○	◎	◎
36	S32	松本 日出男	○	◎	◎
37	S33	阿部 弘		X	◎
38	S33	井上 雅雄		X	◎
39	S33	佐々木 忠夫		◎	◎
40	S33	佐々木 晶一		X	◎
41	S33	白須 勝明	○	◎	
42	S33	平井 雅夫		X	◎
43	S33	菱田 三郎		X	◎
44	S33	福田 雍弘		X	◎
45	S33	三宅 昭彦			
46	S34	大多和 正己		◎	◎
47	S34	金久 俊伍		◎	◎
48	S34	後藤 芳弘	○	◎	◎
49	S34	佐藤 忠孝	○	◎	◎
50	S34	高瀬 進	○	◎	◎

	分類	氏名	メール	2期	3期
104	S39	森下 公雄	▲	◎	◎
105	S40	鈴木 允子		◎	◎
106	S40	田中 興一	○	◎	◎
107	S40	内藤 隆	○	◎	◎
108	S40	安田 恵一	○	◎	◎
109	S41	梶原 俊明	○	◎	◎
110	S41	中尾脩一		◎	◎
111	S41	西岡 靖之	○		
112	S41	吉岡 啓	○	◎	◎
113	S41	和田 明紘	○	◎	◎
114	S42	梅木 弘道	○	◎	◎
115	S42	北尾 三治		X	◎
116	S42	高井 貢		X	◎
117	S42	坂井 勝也		X	◎
118	S42	早藤 隆生		X	◎
119	S42	松原 昭夫	○		
120	S42	横山 彰夫	○	◎	◎
121	S44	小谷 正夫	○	◎	
122	S44	藤本 昌則	○	◎	◎
123	S44	山平 知伸		◎	◎
124	S44	吉井 康浩			
125	S45	飯塚 志保	○	◎	
126	S45	上田 善治	○		◎
127	S45	後藤 幸平	○	◎	◎
128	S45	竿山 重夫			
129	S45	坂本 修三	○	◎	◎
130	S45	嶋田 幸二郎	○	◎	◎
131	S45	堀田 英志	○	◎	
132	S45	堀口 祐司	○	◎	◎
133	S46	石田 泰和	○	◎	◎
134	S46	北尾 好隆	○		◎
135	S46	桑原 正樹	○	◎	◎
136	S46	小柴 雅昭	○	◎	◎
137	S46	成見 和也	○	◎	◎
138	S46	樋口 郁雄	○	◎	◎
139	S46	米田 久夫	○	◎	
140	S47	小林 繁夫	○		
141	S47	高木 恒男	○	◎	◎
142	S47	瀧本 哲雄	○	◎	◎
143	S47	山口 繁雄			
144	S47	吉澤 恵子	○	◎	◎
145	S48	犬伏 康郎	○	◎	◎
146	S48	橋本 清保	○		◎
147	S48	服部 和正		◎	◎
148	S48	山本 博	○	◎	◎
149	S49	西島 洋美	○	◎	◎
150	S50	阿久根 隆行		X	◎
151	S50	石田 俊平	○	X	◎
152	S50	小沢 七洋	○	X	◎
153	S50	木下 修治	○	◎	◎

51	S34	萩原 章司		◎	◎
52	S34	間 照夫		◎	◎
53	S34	藤井 敏昭	○	◎	
54	S34	甫天 正靖	○	◎	◎
55	S34	松本 哲哉		◎	◎
56	S34	横山 清一郎	○	◎	◎
57	S34	吉岡 泰男	○	◎	◎
58	S35	安部田 貞治	○	◎	◎
59	S35	飯井 基彦	○	◎	◎
60	S35	衛藤 嘉孝	○	◎	◎
61	S35	大西 雄一	○	◎	◎
62	S35	黒田 亘哉	○	◎	◎
63	S35	鈴江 登	○	◎	◎
64	S35	園田 英雄	○	◎	◎
65	S35	中村 準市	▲	◎	◎
66	S35	林 俊郎	▲	◎	◎
67	S35	坂東 久平	○	◎	◎
68	S35	法貴 英夫	○	◎	◎
69	S35	松岡 謙一郎	○	◎	◎
70	S35	松木 雄一郎	○	◎	◎
71	S35	松本 繁男		◎	◎
72	S35	山田 英二	○	◎	◎
73	S36	市原 守		◎	◎
74	S36	奥 正夫	○	◎	
75	S36	加藤 維希夫	○	◎	◎
76	S36	松本 光之助	○	◎	◎
77	S36	横山 隆		◎	◎
78	S37	池田 晴充		◎	◎
79	S37	市川 喜代始	○	X	◎
80	S37	岩坪 正光	▲	◎	◎
81	S37	奥山 正夫		◎	◎
82	S37	川崎 登也		◎	◎
83	S37	阪口 文雄	○	◎	◎
84	S37	佐原 肇	○	◎	◎
85	S37	柴田 二三男	○	◎	◎
86	S37	高井 禎之	○	◎	◎
87	S37	福西 興至	○	◎	◎
88	S37	三崎 歩	○	◎	◎
89	S37	山崎 治忠	○	◎	◎
90	S37	山中 寛城	○	X	◎
91	S38	伊東 慶明	○	X	
92	S38	小島 堯	○	◎	◎
93	S38	小柳 健一	○	◎	◎
94	S38	中東 弘三	○	◎	◎
95	S38	中里 寿弘		X	◎
96	S38	橋本 清	○	◎	◎
97	S38	早貸 正幸	○	◎	◎
98	S38	廣瀬 良樹	○	◎	◎
99	S38	三河 明義	○	◎	◎
100	S38	森本 國宏	○	◎	◎
101	S38	渡辺 勝彦	○	◎	
102	S39	浅井 敬造			◎
103	S39	田中 邦雄	○	◎	◎

154	S50	熊見 孝彦		X	◎
155	S50	後藤 康博	○	◎	◎
156	S50	柴岡 浩	○	◎	◎
157	S50	高野 良	○	X	◎
158	S50	寺澤 通隆	○	X	◎
159	S50	中川 順之	○	◎	◎
160	S50	橋角 誠		X	◎
161	S50	濱田澄郎	○	X	◎
162	S50	松永 実	○	X	◎
163	S50	松原 美砂子	○	◎	◎
164	S50	松本 博	○	X	◎
165	S50	水野 庸子	○	X	◎
166	S52	有吉 晶子	○	◎	◎
167	S52	白井 文朗	○	◎	
168	S53	伊山 正三	○	◎	◎
169	S53	高橋 伸和	○	◎	◎
170	S53	長井 寛彰		X	◎
171	S53	西村 千佳子	○	◎	◎
172	S53	藤村 知男	○	◎	◎
173	S53	宮崎 義也	○	◎	
174	S53	森川 滋明		X	◎
175	S53	山田 衛	○	◎	
176	S54	柏原 俊博	○	◎	◎
177	S54	清水 多佳子	○		◎
178	S54	清水 穂積			◎
179	S54	土井 謙吾		◎	◎
180	S55	荒木 泰博	○		
181	S55	芝 泰清			
182	S56	今井 義彦	○		
183	S56	中野 峰夫	○		
184	S57	萩野 毅	○	◎	◎
185	S57	神野 友香子	○	◎	◎
186	S58	徳永 純子	○	X	◎
187	S58	青木 伸治	○		
188	S58	岡 修也	○	◎	◎
189	S58	垣田 直彦	○	◎	◎
190	S58	姫野 貴司	○	◎	
191	S58	藤上 和久	○	◎	
192	S58	宮原 雅彦	○		
193	S59	穴迫 康之	○		
194	S59	島田 太朗	○		
195	S59	吉岡 崇	○		
196	S60	西内 誠		◎	
197	S62	木村 由和			
198	S63	井藤 晶基	○		◎
199	S63	川端 利香	○		
200	S63	原 彰宏	○		◎
201	TS1	赤谷 宜樹		X	◎
202	TS1	池上 俊		◎	
203	TS2	阪上 智子	○		
204	TS4	中谷 昭彦	○	◎	◎
205	TS5	中村 誠一		X	◎
206	TS6	東光 勝也		X	◎

京都工芸繊維大学色染物質会事務局

〒610-0121 城陽市寺田今堀 108-15

TEL 0774-52-4909

MAIL sikisen@matugasaki.com

URL <http://www.matugasaki.com>

発行人 色染物質会 会長 佐藤 忠孝